

南方（仏印）

中支からハノイまで

福島県 長谷川 才 記

会津若松の東部第二十四部隊に入隊したのは昭和十七（一九四二）年も押し迫った暮れの十二月二十日でした。この部隊は集合するだけの部隊で、僅か十七日間居ただけで年明けの正月七日には中支に向けて出発する慌ただしきでした。

下関、釜山、山海関、杭州を経由して船や鉄道を乗り継いで中国浙江省金華に駐屯している第二十二師団歩兵第八十五連隊第三大隊第十一中隊清水隊に入隊しました。内地を出てから一週間目の

一月十三日です。

私ら初年兵五十四人は小銃、軽機、擲弾筒、重機の各班に分かれ、一期の検閲までの三カ月間の猛訓練に入りました。身体が弱い者は各中隊から五人宛、健兵対策として九カ月の特別教育があったようです。金華の街は一年前は戦場だったようですが人口十万人の大きな街で治安も回復していました。第三大隊本部もここにありました。兵舎は日本軍が建てた木造平屋建で、床板張りの本格的な兵舎で、班ごとに部屋が別れ鉄の寝台にワラ布団が用意されていました。

その後一年四カ月の間この金華の地で軍隊生活を暮らすことになるのですが、六十年後の今日一番印象に深いのは、初年兵当時一番の楽しみは

食事ですが、その食事の量が何と少ないことでした。

初年兵の腹は乞食腹といって喰っても喰っても腹が空いてたまらないのですが……。

飯盒の蓋に八分目しか飯がないのには参りましたね。仕方ないから早く食べて古兵や下士官のところへ行って「食器洗いに参りました」ということにして残飯にありつく有様でした。古兵に意地悪いのがいて、わざと残飯に水をかけておくのです。現地の生水は赤痢のもとですから生水は絶対の飲めません。恨めしげに水が引くのを待つて上の方をさらって食べたことを思い出します。

なぜ飯が少量なのかは後日判明しました。一期の検閲後、古兵と食糧受領の使役に出たのですが、船で運ばれてきた米袋を食糧庫にはこび込む時に古兵が、竹筒を米袋に突き刺して持参した乾パンの空袋に「ザー」と詰め込むではありませんか。古兵はその米を売って自分等の飲み喰いに使っていたのです。

初年兵教育の教官は温和しい理解ある立派な人でした。長野県師範学校出身とか。ある夜間演習の時、初年兵が空腹なのを察してくれたのでしよう。形ばかりの訓練を少しやって「小休止！」
「おい助手！ これから酒保へ行って饅頭五十人分買つてこい」。やがて助手の上等兵二人が携帯天幕に包んで戻ってきました。一袋に十個入りを一袋ずつ貰って喰べた味は今でも忘れられませんが。

この教官は私等の後に入ってきた召集の初年兵の教育もやって間もなく内地へ転属になりました。後日談になりますが平成二（一九九〇）年に戦友会を催す時に「あの教官殿を招待しよう」の声が同年兵と召集兵の人たちからも上がり、長野県の各市役所、町村役場に手紙を出して尋ねましたが不明、東京にいる戦友が新聞の尋ね人で探してもらったが駄目、幹候同期の人が長野県庁教育委員会に問い合わせたら一発で判明したので、早速案内状を出し何十年ぶりにお目にかかることが

できました。嬉しかったです。

軍隊につきもののビンタは相当もらいました。初年兵で入った時には内務班には四年兵の一等兵がたくさん居りましたからシゴキは相当なものでした。学科の教育で軍人勅諭や各種操典の暗誦のできない者に対する罰は多種多様で目を覆う程でした。戦場における一致団結の精神を涵養する方法だとの説もありますが相当疑問のある教育方法だったと思います。

対戦車肉攻、対空射撃演習でも激しく鍛えられました。竹竿の先に凝製の手榴弾を縛り付け、古兵が天幕で造った戦車の模型に向かって砂利道に伏せて待ち伏せ、近づくと飛び起きて突っ込むのですが、タイミングが悪いと古兵に軍靴で蹴られる事もしばしばでした。

昭和十九年五月二日、南支那方面での作戦参加のため鉄道貨車で金華を出発し上海に集結しました。その頃の海上輸送は米國潜水艦による船舶の

被害が増大し作戦に支障が出てきました。第二十二師団も第一次輸送に第八十四連隊を、第二次に吾が第八十五連隊を、第三次に第八十六連隊を海上輸送することに決定しました。

昭和十九年五月二十三日、上海を出港しましたが、兵隊は南方とは思っていたが南方のどこかは知らされず、五月二十六日、着いたのは台湾の高雄でした。

上陸する事なく五月二十九日出港、六月二日広東の九竜港に上陸、六月六日広東の中山大学に集結して第二十二師団全部が揃うのを待ちました。

ところが第三次輸送の第八十六連隊は運悪く敵潜水艇にやられ、七〇%の人員は救助されましたが兵器弾薬その他一切は海没し、七月七日丸裸の状態で中山大学に辿り着いたのです。しかし、この連隊は不運で、到着したその日の夜間、敵機の空襲を受け大きな損害を出したのです。

この初空襲で中隊でも戦死五人、負傷十三人の損害が出ました。あわてて防空壕を掘るように命

令が出ました。残念ながら広東飛行場にいたはずの友軍機は何故か姿を見せませんでした。

中山大学は鉄筋四階建ての大きな建物でした。

抗日反日運動の本山と言われた有名な大学です。

九月九日「ト号」作戦が開始され部隊は中山大学を出発しました。その直前、私は連隊本部勤務を命ぜられ中隊の仲間と別れて行動することになりました。

本部では炊事係ということであったのですが本来の炊事は全くせず、主計将校の命令で主計下士官に連れられてトラックに乗せられ副食の調達に廻されたのです。以来、終戦後の昭和二十年十月に中隊復帰まで本部に居たので、一年余はトラックに乗って各所に行きましたが記憶にありません。

「ト号」作戦は「湘桂作戦」の防諜名称で広東、広西両省の打通が目的で、米空軍の制圧下で昼間は動けず、専ら夜間行動で寝不足と疲労でフ

ラフラになりながら敵と交戦し、予定日数の半分で目的地に到着し、上級司令部から「さすが、八十五連隊」と賞められたそうですが、それだけ兵隊の苦勞は想像に絶するものがあつたと思います。私がもし中隊に残つたならば、あるいは死んでいたと思われました。

汗だくで小銃を肩に行軍する同年兵の傍らをトラックで走り抜けたことも何度かありましたが、任務の別とは言え申訳なく思いました。

その後、第八十五連隊は第二十二師団から離れて独混第二十三旅団（純兵団）の指揮下に入り、西江沿岸の蒙扞で激戦を交えて貴県、柳州、遷江、賓陽、南寧を突破、昭和二十年二月四日仏印国境を夜行軍で通過、二月十六日ハノイ到着、三月九日「明号作戦」発動、三月十日早朝フランス軍本部に斬り込み降伏させましたが戦友五人が戦死しました。

連隊は昭和二十年六月、夜間行軍でハノイ出

発、タイ国の防備強化のためタイ国のバンコクに向かいました。その頃になると後方からの補給はまった無く被服はボロボロになってしまいました。

行軍中に終戦が知らされ八月二十五日、ムクダハンで英軍の武装解除を受けましたが弾丸は隠して持っていました。タイの兵隊は日本軍の小銃と同じ三八式小銃を使用していたので弾薬の補充が無く、私に弾丸を売ってくれということで玉子やタバコと交換したので、タバコなんかはたくさん持っていて同年兵からはうらやましがられました。十月上旬、本部からなつかしの中隊に戻りました。

その後メコン河を民船で渡りウボンに移動し十二月七日ナコンナヨクで帰国を待つ生活に変わりました。まず建物を現地にたくさんある竹を使って造り、かこいの柵も無く、割合自由な暮らしが始まり、捕虜の感じは全く無く、ただ食料はカウ状のものが支給されるだけでしたのでバナナの

芯、蛇、野生の芋、蛙など食べるものは皆喰べました。

英軍の指示で道路作業に出ると飯盒一杯の飯が支給されるので皆が競って応募しました。本部に居る時は、糧秣庫の鍵を預かっていましたので中隊の人から頼まれて色々と品物を融通してあげました。中隊に戻るときには新品の服と靴を貰いましたが中隊の被服係の下士官に取り上げられてしまいました。代わりに中古のものをくれましたが、その下士官が私から取り上げた新品の服と靴を使っているにはあきれてしまいました。

バナナの芯を乾燥すると繊維状になるので草履に編んで軍靴の代用にしていました。編上靴は帰国用に取っておきました。帰国を控えて私物の検査があり、乗船の準備が着々と進む中で、兵隊の間に「軍隊の秩序」特に年次の新旧の矛盾に対する平等の観念が強まり、古兵が新兵に加える私的制裁に反発する空気が高まってきました。

この部隊は編成時に福島出身兵の下に他県兵が

居て、軍隊伝統のシゴキが行われ、それが後から入ってきた福島兵に仕返しがされてきたのでありません。

終戦後の或る時、古兵が夜間のどが乾いて水筒の水を飲もうとしたら空だったのに腹を立てて下級の者をひどく殴ったことに反発して、二十人ほどの下級の兵が団結して抗議して古兵を謝罪させた事件がありました。それ以後は横暴だった古兵が温和しくなり全員無事に復員船に乗りました。

本部でも下士官が兵隊に殴られて血だらけになる事件が起きました。が、「祖国日本の復興は若き諸士の双肩にかかっている。天皇陛下も諸士の帰国を待つて居られる。せつかくの命をケンカで落す愚行を厳に慎め」と会報ができました。中隊長からもコンコンとさとされました。

乗船時の持ち物検査もルーズで、先の者から取り上げた品物も後から乗った者にヒョイと投げ渡すこともあり、私も英兵から渡された将校用の

「図のう」をしかたなくブラ下げていたら、先に乗船した准尉さんから「長谷川君その図のうは今取り上げられた私の物だから、すまんが返してくれないか」と言われて返しました。

昭和二十一年五月二十三日、バンコク出発の貨物船に乗船、六月十二日浦賀港に上陸、六月十七日三年半ぶりに我が家に無事帰り着きました。ただ今、当時を省みますと貴重ないろいろな体験をしてきたものです。

追記

長谷川さんは聞き取りが終了した時、自分の想いを次のように書いた紙をくれました。

『第二次大戦、支那事変、大東亜戦争、何としても孫たちへ語り継ぎたい。

赤紙一枚の尊さと、激動と戦争。

終戦 昭和二十年八月十五日。

昭和と人生

長谷川 歳記 印